
盗賊の娘

烏山 満

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗賊の娘

【Nコード】

N4539V

【作者名】

烏山 満

【あらすじ】

悪名高い盗賊団。その頭領の一人娘はある朝、一人で旅にでた。盗賊としての常識しか持たない、わがままな彼女は盗賊の腕と仲間を武器に冒険の数々を繰り広げるが・・・？（主人公は初っ端から強めです。若干、流血表現が見られます。誤字脱字などあるかもしれません。ご了承ください。どこかのサイトに転載する可能性があります。）

登場人物紹介（前書き）

8月29日「ケイ」を更新。

登場人物紹介

リタ（♀）

年齢… 17歳

身長… 167cm

盗賊団の女頭領の娘。それゆえ一般的な常識は持ち合わせていない。また、幼少時から鍛えられたために戦闘力も高い。ちなみに父親は不明である。

喧嘩好きなどところがある。母親からかわいがられて過ごしてきたため、多少（？）わがまま、よく言えば一本気な性格。

黒髪黒目で黒服をいつも着ているので、よくカラスといわれる。

ケイ（♂）

年齢… 19歳

身長… 178cm

リタと同じ盗賊団の一員だった。褐色の肌にリタと同じ黒目黒髪である。リタの友達第一号らしい。幼い頃に交わした約束がある。

女頭領 （名前未決定・・・笑）

年齢…？

身長…？

盗賊団の頭領。リタを溺愛している。かなりの年だと思われるが、

盗賊団をまとめ上げるカリスマ性がある。

登場人物紹介（後書き）

まだ未決定の部分多いです。

随時更新していきますので・・・。

ブローグゝ逃亡

必ずしも読まなければいけない内容ではありません

崩れかけた城跡を、山の向こうから漏れ出た朝日が照らしていた。

山中に建っているだけあって人氣ひとけが無いと思われたが、かろうじて屋根の残る城の大広間には屈強そうな男たちが何十人と酔いつぶれている。

よく見れば、城の周りにも何人かが見張りをして城に近づく者が居ないか監視しているのであった。

此処こゝは世に悪名を轟かせる盗賊団の隠れ家である。彼らは時々、山から下りてきては略奪や放火など悪事の限りを尽くしていく。被害にあうのは麓ふもとの村々はもちろん、運悪く盗賊と鉢合わせしてしまった不運な旅人まで様々であった。それでも人々が此処、＜東の大山脈＞から離れないのはここが周囲が荒地にも関わらず奇跡的に農業に適した土地であり、国と国を結ぶ交通の要所となっているからである。

そんな場所を根城にしているため、盗賊団はかなりの財宝を蓄えているのであった。

ところでその盗賊団がどうして兵士やその他諸々の者たちに処罰されないのか。簡単に言えば、盗賊団の頭かしらが役人たちに賄賂わいろを贈っているからである。この頭かしら、もう随分と老けてきているが悪知恵は働く老婆であった。もし買収できなくても、大山脈を越えて兵士がやって来るなどありえない。山に隠れ家を構えているため麓からの

攻撃に備えればよいだけ、その上にこの老婆は荒くれ者たちから異様に信用が厚く、盗賊団がこれまで無敗を誇ってきたのも、この老婆のお蔭だった。

けれどももちろんそんな者にも弱点はあるものだ。

この老婆でいえば一人娘がそれにあたった。育った環境のせいか生意気な娘であつたが、老婆は非常にかわいがっていた。

その娘の名前はリタといった。

さて、その娘といえは今日はやけに早起きをして怪しげな動きをしているのだった。酔いつぶれた男たちを起こさないように静かに広間を横切り、母親の枕元にしゃがみこんでいる。何をしているのかと思えば、老婆が首に下げている鍵を取ろうとしているのであつた。慎重に、物音ひとつ立てずにそれをやり遂げると、老婆にもう一度小瓶に入っている眠り薬を嗅がせ、すばやく金庫室へと向かつた。

先ほども一度述べたが、ここには多くの財宝が溜め込まれている。この鍵はその財宝の大多数が収められている金庫の鍵であつた。扉が軋^きむ音が盗賊たちを起こしてしまうのではないかとリタを不安にさせたが、こちらに近づく足音は聞こえない。自分が通れるだけの隙間を開けるとそこに滑りこんだ。

金庫の中の金色の山はリタの背を越えるほどであつた。うずたかく積まれた中には、国王に届ける途中の使者でも襲つたのだらうか、王冠まで有る。

リタは大きな金塊や装飾物には目もくれず、傷がついていないなるべく凝った装飾のついた指輪などを身につけ、持ってきた袋に宝

石などを詰め始めた。大きな物はこれからの行動の邪魔になるだけだ。目ぼしい物を詰め終わると、わざと金庫は開けっ放しにして厩を目指した。

干草のにおいが充満している小屋の中で、馬達を柱に括り付けている綱を手際良く解いていく。従順な馬達のことだ、一旦は外に出てもまた戻ってきてしまうだろうが、少しの時間稼ぎにはなるかもしれない。リタは一頭に先ほどの袋と身の回りのものを入れたズタ袋を載せ、鞍をつけて外へと飛び出した。

出来るだけ早く山道を駆け下りさせる。後ろのほうで見張りの男たちが慌てて合図の鐘を鳴らしていたが、もう遅い。だいぶ離れたところでリタは一度だけ城を振り返った。

そして、満足そうに笑うと麓の方へ馬を急がせたのだった。

ブログへ逃亡へ

必ずしも読まなければいけない内容ではありません

こんな新参者の小説を読んでいただき、感謝感激です。

今回はブログでしたので情景描写が多く読みにくかったと思います。

次回からは主人公もしゃべりますので多少は読みやすくなるかと・
・。

第一話　酒場にて

朝早くに盗賊たちから逃げてきたリタだったが、少しの休憩を挟みはしたものの、夕焼けが見えるまでずっと馬を走らせていた。

あの子離れしていない母親のことだ。今頃、手下たちにあたしを必死に探させているに違いないんだから。

心の中でそうひっそりとつぶやいたリタは、次の村で宿を取ろうと決め、馬に先を急がせた。



たどり着いた村は随分と寂^{さび}れているようだった。仕事帰りと思われる疲れ切った男を呼び止めて聞くと、この村にある宿は酒場と兼用になっている一軒だけだという。

宿はすぐに見つかった。騒^{さわ}がしい音とランプの明かりがドアの間から漏れでている。

だがしかし、リタが入っていくと酒場の中はだんだんと静まり返っていった。先ほどの陽気な怒鳴り声ではなく、好奇心に満ちたささやき声にとってかわる。

あまり旅人が来ない村なのだろう、しかもやってきたのは年若い娘だ。珍しいことこの上ない。

「宿に泊まりたいんだけど」カウンターにいる老店主に声をかける。

「金は」無愛想な返事が返ってくる。

隠れ家から持ってきた袋の中から小ぶりの宝石を一つつまみ出して無造作にカウンターへ放り投げる。

遠目に見ても随分と値の張るものだとわかったのだらう、突然周囲が騒がしくなった。

一瞬、あつけにとられた店主も客商売を続けている賜物か、たまものすぐに顔を引き締め、

「釣りは出せんぞ」と唸うなった。

「別にいいよ。その代わり、食べ物欲しいんだけど。昨日から何も食べてないし」

店主は無言でうなづくと宝石をエプロンのポケットに入れ、店の裏に入ってしまった。

リタはカウンターの前の椅子に座ると、ざっと店の中を見回した。先ほどまで露骨に向けられていた視線が、弱まる。

いや、一人こちらを気持ち悪い笑みを浮かべながら見ている奴がいた。

男は目があうとゆつくりとこちらに近づいてきた。

「なあ、お嬢ちゃん。それをどこで手に入れたのかは知らねえが、もしかしてその袋の中、金目のもんが詰まってるのかい？」下卑た笑いをしながら聞いてくる。

「少なくともあんたみたいな奴が一生遊んで暮らせるだけのお宝は

入っているけど」

それを聞いて男の笑みはさらに大きくなった。

「おっちゃんは貧乏でよ。そいつをくれると嬉しいんだがなあ」男の体から酒の匂いが漂ってくる。

「欲しいものがあるんだったら自分で奪えばいい。あたしを殴って奪い取ればそれで済む」

とたんに男の目が異様な輝きをした。

「あたしと喧嘩をしたい？負けたらこの袋の中身、全部あげる。でも、あたしが勝ったらあんたの有り金全部貰うからね」

第二話　く喧嘩は大好きだく

リタは自分でも頬が緩むのがわかった。

「あたしを殴るならどうなっても文句はないね？」

男は何も答えなかった。ただじっとこちらをねめつけている。リタはそれを返事の代わりと受け取った。

「いいよ。もともと殴りあうことに異論はないんだ。喧嘩は好きだからね」

今度は満面の笑みでそう言った。そうして突然に表情を消す。

暫しの睨み合い。先に動いたのは男の方だった。リタの顔めがけて拳を突き出した。若干、勢いが無いのはまだ迷いがあるからだろうか。それを片手で顔の横に逸らし大きく踏み込む。

周りで見ていた男たちも一瞬何が起こったのかわからないようだった。

いつの間にか男が床に押さえつけられている。リタはうめき声をあげる男の襟元をつかんだまま、耳元に顔を寄せ、何事かささやいた。

つかんだ手を離してやると男は青い顔をしてリタから遠ざかろうとする。かすれた悲鳴を残して、男は足をもつれさせながら酒場から出て行ったのだった。

酒場中が静まり返っている中、リタの靴音だけが異様に響く。脇を通り過ぎるたびに男たちが怯えたように身をすくめるのが滑稽だった。

「あ、」と突然リタが足を止める。

「あの男から財布奪うの忘れてた！有り金全部いただくって宣言してたのに・・・」がつくりとうなだれるリタの鼻腔を温かな食べ物の匂いがくすぐる。

「おい、嬢ちゃん。食事できたぞ」店主が店の裏から皿を運んできた。

リタは無言でカウンターの席に飛ぶように戻ると早速がつつき始める。

「なるほどこの味だったら店主が無愛想でも客が入るね」

「誰が無愛想だった？」

「嫌だな。食事の味を褒めてあげてるだけなんだから、そんなにらむ事ないだろうに」2人の間には穏やかな空気が流れていたが、それは店主がさっきの出来事を見ていないおかげかもしれない。現に、酒場の客は未だに押し黙ったままだ。

リタはちらりと横目で男たちを見ると、店主に声をかける。

「ねえ、さっきの宝石でさ、ここににいる人に酒おごってやってよ。それやつても充分お釣りはでるはずだからさ」

「随分と太っ腹なこつたな」

「さっき色々あってね」リタはそういつて満足そうに笑った。

「あたしが関係ない奴まで巻き込む節操無しだと思われてなきやいいけど」

第二話　く喧嘩は大好きだく（後書き）

心残りにはアクションシーンが短すぎたこと。

リタにとってはおっさんは弱すぎたようです。

第三話　～面白い話～

「金になる話をさがしてるんだけどさ、何か知らない？」店主はリタを呆れ顔で見つめた。

「もう充分に金はあるんじゃないのか。こんな酒場にでつけえ宝石落としていくぐらいだしよ」

「一生楽しんで暮らせるぐらいはね」

「ならそれでいいんじゃないか。欲を出しすぎると良いことなんて待ってないぞ」

「なんか説教臭い言い方だね」

「年若い娘の身の破滅を黙って見てられるような男じゃないんでね」それを聞くとリタは小さく笑った。

「おじさんみたいな人があたしの親だったら良かったのに」そうして皿の中身を一気に平らげるともう一度聞く。

「あたしは面白いことをしたいだけなんだよ。金は後からついてくるオマケみたいなもんだと思ってる。でも金のあるところにはきつとあたし好みの危険で面白い出来事がゴロゴロ転がってるはずなんだ。なんか心当たりはないかい？」

「人生そんなにうまくいかないとおもうがね。それなら客の方がいろいろ知ってると思うが」店主の問うような目つきに客たちもおずおずと会話に参加してくる。

「そついや隣村で家畜がいつぺんに殺されちまったとか・・・」

「この前の事件の指名手配犯だって捕まってないじゃないか」次第に熱が高まってきたのか口々に色々述べ立て始める。

「それより東の大山脈の近くを通る商人の警護をやればいいんじゃないか？ 嬢ちゃん強いし、あそこを根城にしてる盗賊共をやっつけられるかもしれねえ」それには同意の声がいくつも上がった。彼らも盗賊団に苦勞を強いられてきたようだ。

「それは無理だね。・・・あたしはあいつらに目を付けられてるから山脈には近づけないんだ」とたんに残念そうな声上がる。噓は言っていないとリタは心の中でつぶやいた。

「そっついや、ここから少し離れたでっけえ街で冒険家を探してるとか聞いたな」

「それは俺も知ってるぜ。なんでも古い教会から秘密の通路が見つかって、その奥にはお宝が山のようにあるとかないとか」リタは男たちのほうを振り向きにつこり笑った。ようやく面白そうなことに出会えそうだった。

「その話には少し興味があるな。詳しく聞かせてくれ」

第三話　く面白い話く（後書き）

あ、今回は少し短いですかね？

そんなに間を空けず次話を投稿するつもりなのでカンベンしてください・・・。

第四話　く決別と出発く

酒場で飲んでいた男たちもだんだんと帰りはじめ、リタも部屋に行くことにした。

これから行くところも決まったしさつさと次の場所へ移らないと追っ手が来るかもしれない。

案内された部屋はベットと小さな机と椅子しかない簡素な部屋だったが、廃墟暮らしのリタには随分と豪勢な宿に見えた。

ベットの上に2つの袋を置くと、金属がぶつかる甲高い音が響いた。持ち出してきた宝の袋の方は脇に寄せておいて、もうひとつの袋を開ける。

中に入っていたのはリタの数少ない日用品である。

服の替えが何枚か。コート一枚。どれも相変わらず色は真っ黒であった。それからナイフが何本か。大きさはまちまちで形もいろいろである。それから鉤付ロープ。

一般常識とはかけ離れた日用品ではあるが、それはともかくリタはナイフの中から一本を選び出し、そのほかのものは袋に放り込んだ。そしてそれを器用に梁はりの上へ載せると、今度は宝の袋の方を引っつかみナイフを持って窓に近づいた。

あてがわれた部屋は2階だったが、それほど立派な建物ではない。リタは難なく地面へ飛び降りることが出来た。

そのままあてもなく目の前の木立の中に入っていく。リタの目は月明かりでも充分足元が見えるように訓練されていた。危なげもなく木の根を飛び越え、どんどん森の中を進んでいった。

突然足を止める。あたりをぐるりと見回すと、おもむろにしゃがみこみナイフを地面に突き立てた。そのまま穴を掘り、ある程度の深さになると袋を穴に投げ捨てる。

元々、金庫からこんなものを持ってきたのは嫌がらせのためだった。そして、母親への決別の意味もこめて盗んできたものだったが、これからは必要ない。

何よりこんなもの大事に抱え込んでたらあたしは本当に自由になれないさ。

元通りに穴を埋めなおし穴の痕跡を出来るだけ消すと、ナイフについた土を綺麗にぬぐい宿に戻った。

一階の窓枠に足をかけ、壁の出っ張りをつかんでするりと2階まで上る。

靴の泥を申し訳程度に払うとリタは床に寝転んだ。ベットでぐっすりと眠られるような平和な生活はしてこなかった。親元を離れたところでその暮らしをやめるつもりもない。

リタはナイフを握ったまま、うとうとと眠りに入ってしまった。

○

○

○

目が覚めたのはまだ陽も昇らず暗い頃だった。

手早く荷物をまとめ、足音をしのばせ階段を降りる。

「随分と朝が早いんだな。誰も起きていないかと思った」リタは力

ウンターの店主に声をかける。

「ああ、なんか朝早くに出て行っちまうような気がしたからよ。弁当作つといた」

「親切だね」受け取りながら不思議そうに言う。

「たんまり金を落としてもらったお礼だよ」

「親切ついでに質問があるんだけど。なんでおじさんはあたしを疑わないわけ？自分で言うのもなんだけどかなり怪しいと思うけど」

店主は少し考え込んだ後に答える。

「あんたは将来大物になる」

「は？」

「なんとなく直感で思ったんだよ。だから騙されてもいいと思ってな」

リタは一瞬呆氣にとられた後、にやりと笑った。

「おじさんホントにいい人だ。心配しなくてもその宝石は本物だよ」

もう会うことは無いかもね。リタはそういい残して戸口から出て行った。



「あの女は悪魔の化身に違いねえよ」リタに絡んでいた男が酒場でわめき散らしていた。リタが旅立つたと知ったとたんに酒場にやってきて、こうして昼間から酒を飲んでいるのである。

「あいつがあの時俺に何をささやいたと思う？『酔っていなかったら殺していたのに』って言ったんだ」さすがに昼過ぎだからか酒場に人影は少ない。さつきからこの話を延々と聞かされている店主は戸口に誰かが立っているのを見て、やっと話から解放される、といち早く声をかけた。

「いらつしゃい」

「人を探しているんですが」このあたりでは珍しい褐色の肌の青年だった。

「俺と同じような黒髪黒目の女の子だね。見かけませんでした？」店主が口を開くより早く、男が怒鳴った。

「お前はあの悪魔の仲間か？そいつならもう此処こゝにはいねえよ」

「此処にきてたんですか。いつどこに出発したかわかります？」今度は店主が口をはさむ。

「あんたはあの嬢ちゃんを追ってんのかい？」

「追うなんて人聞きの悪い。彼女に会いたいですよ。危害を加えるつもりなんてありませんし。彼女の仲間ですから」青年は笑って言ったが、その目には何か執着心のようなものが見え隠れしているように思えてならない。

「あの子なら教会街へ行つたよ」

「此処から南へ行つたところの街ですか？」

「そうだ」

「判りました。ありがとうございます」くるりと背を向け出て行くこととする。と、突然足を止めて言った。

「お礼にいいことを教えますよ。今、東の盗賊団がね、大山脈の近くの村をしらみつぶしに訪ねてるらしいですよ。おそらく此処にももうすぐやってくるでしょう」そして今度こそ一つに縛った長い黒髪を揺らし、酒場から出て行ったのであった。

店主は今更ながらにあの男に少女の行き先を教えてしまったことを後悔し始めた。

第四話　く決別と出発く（後書き）

怪しげな新キャラ登場!!!

っていつのをやっと思けたので「安心です」。

第五話　～再会～

リタの行方を追っているという青年は、酒場を出た後、すぐに馬を走らせた。

店主の話を信じるとすれば、リタにはその街で会えるだろう。

もしリタが街に寄っただけで、すぐに出発してしまっていたら、また手がかり無しで探さねばならないことになってしまうが。

せつかく足取りをつかめたのだ。この機会を逃す訳にはい^のかない。

次第に道の両側の木々が増えてきたところで、青年は馬を止めた。道の脇に見覚えのある馬がうろついている。

近寄ると、どうりで見覚えがあるはずだ。リタが隠れ家から乗っていた馬である。

この近くに、いるのか？

そこまで考えた時、嫌な考えが浮かぶ。

リタがさらわれたという可能性もある。ここらにも奴隷商人はい^かるだろう。一人きりの少女など商人たちにとって格好の獲物だ。いくらリタでも何人にも囲まれたら……。いや、リタだったらむしろ商人を袋叩きにしてついでに身ぐるみを剥がしていそ^うのだが。

突然、上から何かが降ってきて、馬から落ちる。あまりに突然であり、降ってきたものにのしかかられているので動けず、青年は受身をとれずに落馬の衝撃で肺の中の空気を全部吐き出した。

それから回復する間も与えられないまま、首筋に冷たい刃が押し当てられる感触がする。

「なんだお前一人なのか。てっきりもつと人数が多いかと思ったが」青年を見下ろしながらリタはつぶやいた。

「街に行く前に追っ手を一度始末しておこうと思ったんだが」それにやっとのことで呼吸を整えた青年が答える。

「一人で追っ手と戦えると思ってたのか？」

「戦わなきゃ街に行つてから大変になるじゃないか。それよりさつき、何をぼうつとしてたんだ？」青年は正直に答えるとリタが怒るのではと危ぶみ話を逸らした。相変らずナイフは首筋に当てられたままだ。

「ちよつと考え事だよ。まあ、無事に会えてよかった。ナイフをよけてくれないか？」

「一人であたしを追ってきた目的を言えば放してもいい。まさか一人でも捕まえられるとか思ってたんじゃないだろうな」心なしか喉への圧力が高まったようだ。

「違う違う。俺も一緒に連れてってほしくて追ってきたんだよ」

リタが一瞬、力を緩めたのをみて、青年はナイフを押しつけた。

「なんでだ？別にケイなら盗賊団でもやっていけるだろ」リタはナイフをしまいながら聞いた。

その問いに青年、ケイは大きなため息をついた。

「お前のいない盗賊団にいても意味がないんだよ」リタの方をまっすぐ見て言ったが、目があつとすぐに視線を逸らしてしまった。

「大体、小さい頃にずっと一緒にいるって約束しただろうが」
「そうだったか？」リタのつれない返事にがっくりと肩を落とすケイ。

「嘘だよ。ちゃんと覚えてる。なんてったってケイはあたしの記念すべき友達第一号だからな。置いていこうとしたことは謝るよ」

「じゃあ、連れてつてくれるな？」

「ま、いいだろう。これから色々大変になるかもしれないしな」リタは楽しげに笑いかけた。

2人は並んで馬を進める。

「それにしてもなんでいきなり逃げようと思ったんだ？」

「別にいきなりじゃないさ。母様かあさまにここから出て行くと云ったら地下牢に閉じ込められてな。そこからほとぼりが冷めるまで3ヶ月待つてやつと実行できたんだ」

「なるほど。あの頃、会わせてもらえなかったのは閉じ込められてたからなのか。さすがお頭、ものすごい溺愛ひたひたっぷりだな」

「あれは愛じゃないだろ。娘を監禁するとかどんな神経してるんだ」
「まあまあ。いやそれよりもさ、俺が聞きたいのは何がきっかけだったかってことだよ。今までそんなこと一言も言わなかったのに。やっぱお前が逃がしたあの娘が関係してんのか」

「リデイのことか？まあそれもあるだろうな。リデイからは外の生活色々聞いたから。そんなことより、あたしも聞きたいことがあるんだが。なんでケイはあたしの居場所がわかった？馬の足跡もできるだけ残さないようにしてたのに」

「リタだったら自分の痕跡を残さないようにすると思ってさ」
「つまり？」

「南の方は雨が降ってたから道に蹄ひづめの跡が残るし、他に通れる道は少ない。そこから後は勘を頼るしかなかったけどな」

「勘・・・」

「大丈夫だって。当分あいつらは来ないよ」

「途中で連れ戻されるのは嫌なんだ」安心させるように笑うケイを
尻目にリタは後ろの景色にじっと目を凝らした。

小話　教会街への道のり

教会街はエルシリア教の大本山として栄えている。そのためエルシリアの街と呼ばれる方が一般的であった。

エルシリア教とは、善悪のバランスが崩れたときに救世主として現れるという聖母エルシリアを信仰する宗教である。

「話によるとそこで面白い事をやってるらしい」

「面白い事？」

「行けばわかるさ」

「教えてもらえないのか」

「楽しみにしとけ。というかあたしもよく知らん」そう言うリタをケイはあきれたように見つめる。

「そういうことはきちんと事前に調べとくべきだろう」

「・・・説教臭いぞ」

「せっかく心配してやってるのに」

「余計なお世話だ」

「素直じゃないねえ」

「うるさい。大体なあ、お前はあたしについてくるって言ったんだから黙ってついてくればいいんだよ」

「つれないな」

「ま、あたしが面倒事に巻き込まれる時はお前も一緒だからな。心配する必要は無いんじゃないか？」

「・・・今のはすごく回りくどい『お前のことを信頼してるぞ』って言う意味の言葉か？」ケイが顔を覗き込もうとするとリタはすぐさま顔を向こうに向けた。

「・・・知らん。どうだろうな」

「そうか」ケイは顔をそむけたままのリタを見て笑った。
顔は見えなくても耳が真っ赤なのが見えてるぞ。

「何を笑ってるんだ？」

「いや、リタは可愛いなあと」

「・・・お前はそんなに殴りたいのか」

「褒めてるだけじゃないか」

そんな他愛も無い会話を繰り返しながらリタとケイはエルシリアの街を目指した。

第六話　く怪しい雲行き

「息が詰まる。もつと広い部屋は用意できなかったのか」と、リタが呻いた。

「申し訳ございません。教会街内部には本来、信者の方しか入れないようになっておりますので」戸口の近くに控えていた男が答える。その声にわずかな侮蔑の念を感じたリタは気を落ち着かせるために深呼吸をした。

荒くれ者たちには身分不相応な場所にいる、と言いたいのだろう。今、追い出されるわけには行かない。落ち着け。

心の中で何度かつぶやき、それでも抑えきれなかった怒りは目の前に座るケイのむこうずねを蹴飛ばして発散する。

広間の中はざつと20人ほどの男がいた。どれも皆、殺気立った目をしており、それがまたリタの神経を逆撫でしていた。

なおも不機嫌な表情を崩さないリタに、涙目になったケイが言う。「イライラするのは判るけどさ、なにも俺に当たることは無いんじゃないか？」

「あたしがイラついているときに目の前にいるのが悪い」
「理不尽」

「大体、こつちからわざわざ来てやったっていうのに武器を取り上げるなんておかしいだろう。もしかしたら――」

リタとケイの視線がかち合う。

「案外これは罠かもな」

「突然後ろからグサリ、なんてことになったりして」教会側で悪党共を始末しようとおびき寄せた可能性もある。

「まあ、いざとなったら素手でも戦えるさ」ケイは興味をなくしたように投げやりに言った。

「武器といえばお前、自分のハルバードどうしたんだ？」

とたんにケイは決まり悪そうに笑う。

「ああ、実はさ、隠れ家を抜け出す時に持ち出せなくて」大方のところ母様かあさまが持ち出しを禁じたのだろうと、リタは勝手に想像する。「で、そのことなだけど。リタは出て行くときにお宝結構持つて行っただろ。だからさ、その・・・」

リタはケイの言わんとするところがわかり、笑みを漏らした。

「ほお。あたしにたかろうとするわけか」

「いや、やっぱ素手だとリタに迷惑かけることになるかもしれないし、な？」

「残念だが今あればあたしの手元に無い」

「へ？」

「前の村の宿の裏に埋めてきたから」

若干青ざめたケイを励ますようにリタは続ける。

「でも金ならすぐに手に入る予定だ」

「そうなのか？」

「ここでの仕事を果たせれば報奨金が出るはずだ。しかもエルシリア教は信者の数が大陸一で知られている。懐に入ってくる金も相当のはず。そこまでケチじゃないはずだ。ま、この話が嘘で無ければの話だが」

きちんとした保障がない話ではあるが、ケイを元氣付けるには十分だったようだ。

「そうと判れば一安心だ。お、なんかお話があるみたいだぞ？」

戸口から入ってきたのは若い神父だった。

「皆さん、ようこそいらつしやいました。私が隠し通路探索の責任者を務めるクラークです。以後お見知りおきを。まず最初に言っておきたいことは、この探索には非常に危険が伴います。現に通路の中に入り帰らぬ人となった聖職者が何人もいます。ここで辞退して

いただいてもかまいません」

クラークは長い間を置いて一同を眺め回したが、誰一人その場を動こうとするものはいない。リタはクラークの顔がわずかに曇ったのを見て取った。

責任者を任されている男でさえ、この探索に乗り気でないらしい。どんどん雲行きは怪しくなっていくが・・・。

リタは体の中をゾクゾクする興奮が駆け巡るのを感じていた。

第七話　く誇りく

「しかし神父さんよ。このままじゃあ、ちょっと人数が多すぎるんじゃないかい」壁に寄りかかっていた男が声を上げた。

「人を減らさなけりやまともに探索なんざ出来ねえよ。なんか知らんが女子供まで混じってるし、そいつらはお家うちに返してやるべきじゃねえかい」男はあごでリタたちの方を指し示した。

ケイはリタの顔を見たたん、これはまずいとはつきり感じた。眉間に深くシワがより、明らかに怒っている風なのに、口元には実に爽やかな笑みが浮かんでいる。

こんな複雑か且つ危ない笑顔などなかなかお目にかかれないだろう。

「それよりもここにはご老体が混じっているようだから、そつちを減らすべきだと思うね。足を引っ張られちゃこつちが困る」リタに話させてはいけないと、慌てて切り返す。

「おうおう、言ってくれるじゃねえか坊主。そんなに睨にみ付けられちゃあ怖くてちびりそうだぜ」ケイの制止を押しつけて、せせら笑う男の前にリタはゆっくりと歩を進めた。

「さつさとここから出ていきな。お前のママはここにはいないぜ」ニヤニヤ笑う男の顔は一瞬の間を置いて歪められた。

「出て行くのはお前の方だろう？安全で快適なお家へ帰ったらどうだ？」いつの間にか取り出されたナイフが男の腹に突き刺さるばかりに押し付けられていた。

「武器は持ち込み禁止じゃなかったのか？」少しかすれた声で男が言う。その眼はナイフを離れようとしなかった。

「罨かもしれない場所に丸腰で乗り込んでいく馬鹿がいるか？ 場慣れしていない教会の奴らの眼をかすめるのなんか簡単すぎてお話にもならん」ナイフは徐々に胸を伝い、男の喉元までやってきた。

「どうせ此処の奴らもなにかしら持ち込んでるだろうさ。まあ、それはともかくとして。お前はあたし達を侮辱したな？」ナイフが男の喉仏の辺りをくすぐった。

「言ったからにはそれなりの報いを受ける覚悟はあるんだろうな。言っておくが、あたしの誇りは高くつくぞ？」

第七話　く誇りく（後書き）

お待たせしました。やっと更新です。（待っている方がいるのか微妙ですが）

時間がかかった割りに内容が少ないのは見逃してください・・・。

第八話　　盗賊の血筋

「彼を放してやってください。ここで武器などを持ち出されては困ります」クラークはリタがナイフをよけないのを見て言い添えた。
「ここからつまみ出してほしいのでしたら結構ですが」それを聞いて渋々ナイフをしまう。

「それに彼の言うことにも一理あります。命を粗末にするべきではありませんよ。あなた達はまだ若いのですからなおさらに・・・」

それを聞いて今度はクラークの方をにらみ付ける。

「始まる前から命の心配か？馬鹿らしい。言っておくが、あたしのナイフはあなたの年齢の何倍もの人数の血を吸ってるんだ。一日中、机の前に座っているお前のような奴なんか意見される筋合いはないね」

「それに、あたし達はこんなところで死ぬ気はない」

リタの眼光の鋭さに、クラークは身が震えるような心地がした。

「ケイ。あたしにつくと決めた以上、勝手に死んだら許さんから心しておけ」

リタは気付いているのだろうか。怒ったように言ったその言葉は、リタというよりその母親の口から出たような言葉だ。

まだ、お頭の影がリタについて離れないのか、それとも血筋のなせる業か。

リタが落ち着いたのを見て、クラークが声を上げる。

「先ほど言っていた人員の選別については、教主様が神にお伺いをたてているところです」

その言葉を待っていたかのように、扉が開き少年がクラークに封筒を渡す。

「お名前を呼ばれた方は、私についてきてください。発見された通路の入り口までご案内します」

不安げな眼をしてクラークは付け加えた。

「どうか後悔のなさらぬよう・・・」そうしてわずかに首を振り、封筒に書かれた名前を読み上げ始めた。

第八話　く盗賊の血筋く（後書き）

すいません……。更新遅い上に短い……。

次からまじめに冒険が始まりますよー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4539v/>

盗賊の娘

2011年11月13日10時03分発行